

令和4年度 学校関係者評価書 鈴鹿市立愛宕小学校

評価項目(1)学力向上に向けた取組
本年度の活動(具体的な手立て)と指標

①地域から学ぶ「社会科・生活科・総合的な学習の時間」を軸にした取組

・愛宕地区を中心とした地域教材を活用し、子どもたちが主体となった探究的な学習過程を充実させるための学び方の改善に取り組む。

②全国学力・学習状況調査やみえスタディ・チェックの結果を活用した主体的・対話的な学び方を育成する授業改善

→提案授業の実施:研修3回・人權3回

→児童アンケート「授業で自分の考えや意見を積極的に発表している」

(「よくできた」と「だいたいできた」を合わせた達成度)低学年80% 高学年70%以上

③家庭学習の定着

・「家庭学習の手引き」改定版を作成, 配布し, 保護者に啓発 → 6月に全校配布

・内容:読み・書き・計算, 時間:学年×10分 → 懇談会や学年通信で保護者へ啓発

→児童アンケート

「宿題や家での勉強に自分から進んで取り組んでいる」

(「よくできた」と「だいたいできた」を合わせた達成度)85%以上

「家で勉強する時間」目標達成 低85%以上 高75%以上

④読書好きの子どもを育てる教育活動の推進

・学期初めの火・木曜日の朝学習で読書に取り組む。→実施率90%

・学年の系統性を考えた学校図書館の活用や学級文庫の充実

→発達段階に応じたカリキュラムの作成

・図書委員会が主体となって行う来館者増加への取組

(新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況を見ながら図書館まつり等のイベントを開催)

・読み聞かせボランティアによる朝学の時間の読み聞かせ

⑤ICT機器を活用した学習活動の促進

・chromebook, プロジェクター等ICT機器を活かした学習活動の活性化を図る。

→日常の授業での活用推進

・児童が毎日chromebookを活用できる環境にする。

→持ち帰りに合わせて水曜にログアウトし, 木曜にログインする。

・児童がchromebookで家庭学習を行う習慣を身につける。

→週1回から始め, 年度末には4~6年生がほぼ毎日持ち帰る。

・chromebookを使う上でのルールを作り, 規範意識をつける。

・情報モラルに関する意識向上 →高学年に向けて, ICT支援員による情報モラル教育を年1回以上実施

・ICT支援員によるchromebook活用 →児童への学習支援や授業サポート(月2日)

達成状況及び成果と課題 ※ ○→達成できている, ▲→達成できなかった・課題が残った

①地域から学ぶ「社会科・生活科・総合的な学習の時間」を軸にした取組

○「社会科・生活科・総合的な学習の時間」が楽しい。

→低学年91.8%, 中高学年84.6%,

○児童が自分で問いを作り, 調べたり考えたりする力がついたか。

→低学年82.3%, 中高学年65.3%, 保護者63%

▲低学年は, 問いを持ち主体的に楽しく学習する姿があるが, 中高学年になるとその姿が減っていることがわかる。教員自身の学び方への意識改革を進め, 子どもたちが主体的に考える授業づくりに取り組む。また, 愛宕地区に誇りが持てるよう, 地域教材の掘り起こしを積極的に取り組みたい。

②全国学力・学習状況調査やみえスタディ・チェックの結果を活用した主体的・対話的な学び方を育成する授業改善

○全職員でみえスタの採点をし、強みと弱みを分析した。課題をもとにそれぞれの学年で授業改善に取り組んでいる。

○全学年で研究授業を行い、授業力の向上に努めている。また、教頭が研修を行い、全校でのノート指導の徹底を図った。

▲みえスタ、学調より、5・6年生は国語は県平均であるものの、算数は平均以下になってしまった。

▲意欲的に発表している児童は、低学年では約80%、高学年では約56%となっており、学年が上がるにつれて発表をためらう様子である。

○年間指導計画は春と冬の2回見直しをした。

③家庭学習の定着

○家庭学習の大切さは保護者に通信等で啓発している。

▲宿題は、目安時間に対して低学年では約63%、高学年では約76%の児童が到達できている。低学年の宿題が多いという保護者からの声がある。

▲クロムブックの持ち帰りについては、低学年にとっては重たく負担であるという声があるため、国語算数以外の教材の持ち帰りについて再度検討している。

・家庭学習を定着させるために、その必要性和重要性を保護者に理解してもらう手立てを考える必要がある。

④読書活動の推進

・学期初めの火・木曜日の朝学習で読書をするのは、ほとんどの学級で取り組めた。

・前期後期で子ども達主体で図書館まつりを行うことができ、全校児童が積極的に図書館に行くようになった。また、図書委員会でおすすめの本の紹介カードを書いたり、読んでほしい本のポップを作って掲示したり

・国語の授業で、子ども達同士でお気に入りの本を紹介しあうことで読書に対する関心が増えた。

・児童の読みたい本の希望を聞いて、人気のある本を購入することで、来館者が増加した。

・読み聞かせボランティアは、朝学習の時間に読み聞かせをしてもらい、子どもたちは喜んで聞き、興味を広げることができた。また、読み聞かせの後、子ども達が直接感想を伝えることで、考えながら内容を聞くことがで

⑤ICT機器を活用した学習活動の促進

○児童が毎日chromebookを活用できる環境とすることができた。必要な時にログイン・ログアウトを行う習慣を身につけさせることができた。

○ICT支援員によって、ほとんどの学級が学習支援や授業のサポートを受けることができていた。

▲情報モラル教育は、高学年に向けてICT支援員による授業を実施したが、破損、著作権に関する意識や個人情報に関する認識の甘さが児童にあるため、今後も継続して指導をしていく必要がある。また、管理職と教職員が連携し、家庭で情報モラルについて話し合ってもらおうよう啓発に努める。

学校関係者評価

・ChromeBookを持ち帰らせることで、子どもたちの通学カバンが重くなっている。子どもたちの負担を軽減する策を明らかにして示す必要がある。通学カバンについては、ランドセルは大きく重いので、別のものでもよいことを、保護者に周知していく必要がある。

➡ 家庭学習で必要ない教科書やノート等は、学校に置いていかせることを全校でも確認している。

・持ち帰ったChromeBookで、どのような学習を家庭でさせていくのか。

➡ 4, 5, 6年生は、今週から毎日持ち帰っている。最初の取組として、翌日の予定や宿題を学校でスプレッドシートにローマ字入力して、家で連絡帳として使用させている。また、インターネットを用いた調べ学習、タイピング練習だけでなく、オクリンクを使って課題を提出させたり、調べ学習の内容をスライドやジャムボードを使ってまとめさせたりする等、多様な活用は今後広げていきたいと考えている。

・家庭学習が多いという意見があるが、どう考えるか。

➡ 一部の保護者から、宿題が多いという意見をいただいている。本校では、宿題にかける時間として、「学年数×10分～15分」という目安を設けている。各学年、音読、漢字・計算練習を基本として宿題を出している。宿題にかかる時間には個人差があり、家庭で保護者と子どもと一緒に過ごせる時間にも差があることから、負担に感じる場合は学校に相談してほしい。

・スクリーンタイムの削減と保護者への啓発を、PTAや地域とも連携してさらに進めてほしい。

・端末の活用を推進することは必要だが、一方で大切な読書活動もしっかりと時間を確保させていく必要があるのではないかと。家庭での親子読書や音読を聞いてもらう活動は、大切にしていってほしい。

・子どもたちの学習塾の利用率はどの程度なのか。すべての学習の土台である国語・算数の学力向上は、しっかりと進めてほしい。

・生活科・社会科における地域教材の開拓、授業での活用は、子どもたちが郷土である愛宕地区に誇りをもてる取組となる。さらに推進をしてほしい。

○校区内では教材対象となる商店や企業が少ない中で、見学対象を組み立て行われており、「楽しい」だけではない子どもたちの充実した学習になっていると思う。

○普段の授業では味わえないことがその地域にはあるようだ。焦らずじっくりと地域の人とのコミュニケーションを取り続けたい。

○子どもの授業で、愛宕地区にある店や施設をグループに分かれて訪ね、調査する授業があった。学校で座って受ける受動的な授業より、主体的に積極的に参加でき、とても充実していた。

○地域教材の学習は、先人の知恵や努力に触れ、愛宕地区に誇りを持ち、ゆくゆくは地域に貢献しようという気持ちを持つことにつながると思うので、今後も取り組んでほしい。

○学年により、町探検やお店訪問、田植え・稲刈り等、地域を取り入れた学習を行っており、子どもたちにとっては有意義な体験をしている。

○授業参観では、多くの生徒が積極的に発言している様子も見られ、自分の意見を伝える力が備わっていると感じる。自分で考え疑問を解消する力、人に伝える力が総合的についていくと良いと思う。

○意欲的に発表している児童で高学年が低いのは、他の人と比べられて自分の方が劣っていると思われるかもという意識があり、少しずつ大人へ成長する過程なのかもしれない。

☆児童は自分が何に興味があるのか理解していないことがある。たくさん選択肢をもてるようにしてほしい。

☆学習時、科目に重要度の差があるとは思わないが、特に、国語に関する力、読解力をつけてもらいたい。高学年になるにつけて大切さを実感する。

○宿題の量は適切だと思う。家庭学習は、親の忙しさもあり、丁寧に対応することが難しい時もある。宿題だけでもしてくれると親としても安心する。しかし、苦手な分野については、個人的に勉強する必要があるため、保護者の意識づけを続けてほしい。

▲宿題を含め家で学習する時間は、達成にはもう少しなのか。読み・書き・計算はやはり基本中の基本だと考えている。保護者の方も忙しいとは思いますが、低学年に関しては特に僅かな時間でも一緒に取り組んでほしい。

○「本を見る・読む」という行動は、機会がなければ過ぎていってしまう。朝の読書や図書館まつりなどがある機会であるので、継続した取組としてほしい。また、ボランティアの「読み聞かせ」も良い機会だと思う。

○子どもに読書を楽しんでほしいのは、親の望みでもあるため、朝学習での読書は、読書を習慣づけ、その楽しみを知る良いチャンスだと思うので、続けてほしい。子どもも読みたい本を図書館で読めてとても喜んで

いる。

○じっくり読書に取り組むことは、何事に対しても集中して取り組む態度につながると思うので、今後も取り組んでほしい。また、語彙も豊富になり、思考力の向上につながると思う。

○読み聞かせボランティアに参加させて頂き、僅か10分だが、子どもたちの真剣な眼差しはとても嬉しい。だからこそ読み終えた後、沢山の感想を言ってくれる。一生懸命考えと意見を述べてくれる。

☆読書に関してはペーパーレスを避けたい。図書館には多種多様な本がある。背表紙なりイラストを見ていると興味を引く本が見つかるかもしれない。それが楽しい。

○chromebookの活用は非常にいいと思う。小学校からキーボードを使うことは、社会に出た時に有効なスキルとなる。

▲メディアの発達により子どもの読書好きは減少していると思う。家庭内での読書は、本人の気持ちの問題であるので、引き続き推進して頂きたい。

▲情報モラルは非常に大きな問題となっており、いじめ問題に発展しやすいと思う。良い事・悪い事の分別でできる子どもを育てるため、引き続き改善して頂きたい。

☆chromebookの重さは、低学年にとっては確かに負担になると思う。chromebookのシステム・性能について詳しくわかりませんが、教科書を全部取り込むことはできないのか。

今後の改善点

・地域教材の掘り起こしと活用をさらに推進していきたい。

・発表の機会をたくさん作り、発表に慣れさせていく。子どもの発言が先生に向かって答えるのではなく、子供同士で考えをつなげていく授業づくりをしていく。特に中学年で発言の力をつけたい。

・家庭学習の必要性について丁寧に保護者に周知していく。

・宿題支援教室に参加している児童は、学習が定着してきた。今後、宿題支援が必要と思われる他の児童に参加するように勧めていく。

・スクリーンタイム削減の取組の一つとして、図書まつりや親子読書等の読書活動に取り組みたい。

・情報モラルやスクリーンタイムの削減に関する学習を、外部団体の講師の方等を招いて、親子で話を聞く機会を設けたい。

・クロムブックの持ち帰りについては、重量負担を配慮しつつ毎日持ち帰ることとし、キーボード練習、ドリルパークなどの基礎的な学習や調べ学習や日記などの自主的・発展的な学習にも役立てていきたい。

・児童の学力向上には、教師自身の授業力の向上が欠かせない。それぞれの教員が授業公開を行い、積極的に参観し意見を交換し合うことで、互いの授業力をつける。



評価項目(2)子どもが安心して学べる環境づくり

本年度の活動(具体的な手立て)と指標

①「規範意識」の育成と「基本的生活習慣」の確立

・重点取組の徹底 → アンケート(「よくできた」と「だいたいできた」を合わせた達成度)

「学校のきまりやマナーを守っている」 90%以上

「相手に気持ちの伝わるあいさつをする」 90%以上

「日頃から安全に気をつけ、地震や火事、不審者から自分や仲間の命を守る力はあると思いますか」

「自転車に乗る時、ヘルメットをかぶり、一時停止など安全に気をつけた運転をしていますか」 90%以上

・生活習慣チェックシートの活用 → 年3回実施

②人権教育の推進

・一人ひとりの思いに寄り添い、児童の道徳性と自己肯定感を育成する。

→教育活動全般の根幹としての人権教育や道徳教育を深める授業づくりに取り組む。

・課題を抱える子どもの現状と指導を共有する

→毎職員会議で報告。年度末に「見守りたい子どもの研修会」「人権教育実践発表会」を実施。

・いじめアンケートにより現状を把握し、解決へ導く → アンケート実施:学期に1回

→児童アンケート「いじめを見たり、聞いたりしたときにやめるよう言ったり、誰かに伝えることができる」 90%以上

③特別支援教育の推進

・「すずかっこファイル」を活用した、気になる子に係る支援会議を適宜開催する。

・スクールカウンセラーや子ども家庭支援課等の関係機関との連携を図り、児童と保護者を支援する。

④不登校対策・予防と早期対応

・「鈴鹿市不登校対策初期対応マニュアル」とスクールライフサポーターの効果的な活用

→欠席30日以上:0人、10~30日未満:10人(昨年度比-10人)

・スクールカウンセラー・スクールライフサポーターやスクールソーシャルワーカー、不登校支援アドバイザー等の関係機関との連携を図り、ケース会議や支援会議を適宜開催し、児童と保護者を支援する。

⑤健康に関する取組

・学校・家庭・学校三師が連携した健康教育

→学校保健委員会:教職員、PTA代表、校医、学校運営協議会代表が参加し、年3回実施

学校医、学校歯科医、学校薬剤師、運営協議会会長、PTA会長、副会長、保健主事、養護教諭が参加し、学期ごとに学校保健委員会を開催し、児童の健康問題の把握・情報共有を図るとともに、家庭、地域、学校が連携して対応していく。

達成状況及び成果と課題 ※ ○→達成できている、▲→達成できなかった・課題が残った

①「規範意識」の育成と「基本的生活習慣」の確立について

・重点取組について

「学校のきまりやマナーを守っている」

(低学年児童:90.4% 高学年児童:92.4% 保護者:92.2% 地域:93.8%)

○よく守れている。素直な児童が多く、言われたことはよく守って生活ができる。今年度の校内の取組として、学校規律をまとめた「がんばっ10」の定期的実施と月別目標の設定・提示を行ったが、それらの効果は大きかったと考える。

「相手に気持ちの伝わるあいさつをする」

(低学年児童:87.1% 高学年児童:79.8% 保護者:74.1% 地域:50%)

▲目標には大きく及ばなかった。マスク着用があるにせよ、児童の意識向上を図ることができなかった。あいさつは伝わってこそ意味のあるものであることも伝え、相手を見て互いに声に出して挨拶し合うような、つながりあう挨拶の取組を図っていく。

「日頃から安全に気をつけ、地震や火事、不審者から自分や仲間の命を守る力はあると思いますか」

(低学年児童:74.2% 高学年児童:87.5% 保護者:80.9% 地域:81.2%)

▲目標に届かなかったものの、高学年はこれまでの社会科や道徳、総合的な学習の時間等を通じて、防災や自助・共助の意識が備わっていること考える。低学年児童については、学年齢に応じた学習内容がさらに必要であるとする。

「自転車に乗る時、ヘルメットをかぶり、一時停止など安全に気をつけた運転をしていますか。」

(低学年児童:81.8% 高学年児童:96.4% 保護者:91.2% 地域:84.4%)

▲低学年の低さが目に付く。ただ、まだ自転車に乗ることができない児童も多く含まれているとは予想する。しかし、まだまだ視野も狭い年齢であるので、交通安全指導・見守りはしっかりと行っていく必要はある。地藏堂前信号では、自動車による信号の見落としが多いことが分かってきており、折にふれては、事故等に注意するよう指導してきた。交差点等での交通安全についての意識の高まりは、高学年児童の数値に表れ

・生活習慣チェックシートの活用について

▲児童のスクリーンタイムの増加が実態としてある。児童の生活状況をチェックするとともに、適切な生活を呼びかける取組として、引き続き実施していきたいと考える。

②人権教育の推進

・職員会議で子どもの様子を報告

○毎月の職員会議で子どもたちの課題を共有することができた。

・校内人権教育研修会, 年2回

○自分の指導を見直したり, ほかの人の指導を参考にしたりすることができた。

・児童アンケートで子どもたちの考えや思いを知った。

▲「自分の気持ちを友達に言うことはできますか」の問いに対して, 低学年では『あまりできない』と『できない』を合わせると29%になる。

○「いじめはどんな理由があってもいけないと思いますか」の問いに対して, 『いけないと思う』『まあまあいけないと思う』を合わせると高学年では99. 3%, 低学年では96. 7%である。

○▲「困っている友達を助けることができますか」の問いに対して, 低学年では, 約83. 8%↑4. 8%の子が『いつでもできる』『できる』と答えているが, 高学年では約82. 6%↓10. 4%である。

▲「自分にはよい所がありますか」の問いに対して高学年では83. 3%, 低学年では95. 2%の児童が『ある』と答えている。高学年では, 約16. 7%の子が『どちらかというない』『ない』と答えている。これまでも取り組んでいる自己肯定感・自己有用感を高めるための取組を根気強く続けていく。

③ 特別支援教育の推進

○「すずかっ子支援ファイル」を活用した, 気になる子に係る支援方法をスクールカウンセラーの助言を受けながら担任等と話し合うことができた。あゆみ渡しでは, 支援ファイルの見直しや学期毎のまとめをすることができた。

○協力学級担任会を行い, 特別支援学級担任と協力学級が特別な支援を必要とする児童への支援の在り方について互いに情報交換をし, 学ぶ機械を持った。

○関係機関(すくすく)と連携を取り, 子に応じた対応を行った。

④ 不登校対策 予防と早期対応

○「鈴鹿市不登校対策初期対応マニュアル」とスクールライフサポーターの効果的な活用をすることができた。

○けやき教室との連携を図り, けやき担当教員・保護者・学級担任・特別支援コーディネーターで支援会議を持ち, 不登校傾向にある児童への支援を行った。長期的な視点からの支援が必要である。

○スクールカウンセラーと連携を図り, スクールセラー・保護者・担任・養護教諭・特別支援コーディネーターで支援会議を持った。

▲欠席30日以上: 8人, 10~30日未満: 9人という結果になり, 10~30日未満は, 昨年度と比べると減少したが, 30日以上は, 8人と人数が多い。

⑤健康に関する取組

○学校保健員会は予定通り年3回実施している。昨年度に引き続き, 新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から, 縮小規模で行った。内容は本校児童の発育状態や健康状態, 生活習慣や健康教育, さらに疾病の予防と管理, 生活習慣チェックシート・メディアアンケートの結果から, 学校三師より多くのご助言をいただくことができた。また, メディアに着目しがちであるが身近な所で読書の大切さなどを伝え, 本に触れることへの大切さなどのお話をいただくことができ, それを読書活動へとつなげていくことができた。今後も, 学校保健委員会で討議された内容や市教委からの連絡等について, より多くの人に知ってもらうために, 保険だより等の通信や児童保健委員会の活動を通して周知していく。

学校関係者評価

・ヘルメットの着用は, 概ねできていると感ぜられる。

➡ 法改正により, 自転車乗車の際には, 大人もヘルメットの着用が努力義務になった。教員や地域の大人が手本となってヘルメット着用率をさらに高めていきたい。

・挨拶については, 児童・保護者・地域に意識の違いが見られる。挨拶は, 人や社会とつながるための大切なものである。子どもたちに, 挨拶とは何か, どんな価値があるのかを丁寧に指導していく必要がある。

・コロナ禍によって, 子どもたちの生活において, 会話の機会が減少したのではないか。子どもの成長のために, 人との対話の機会を充実させていく必要がある。

・以前と比べ, 子どもたちが清掃活動を一生懸命に行っていることに感心した。意識の向上が感ぜられる。

・教育活動の結果で評価するのではなく, 自分たちが目標達成のためにどのような活動をしたかを評価することで, 教員のモチベーションを上げられないか。

➡ 成果を検証することで, 教育活動の改善を常に行っていく必要があるので, 成果指標は, やはり必要だと考える。

○挨拶について、友達同士、対先生等、常に接している人とは挨拶の仕方が変わることがある。ついおなざりになりがちだ。ごくたまにしか学校を訪問しない私には、子どもたちはよく挨拶してくれる。使い分けしているのかもしれない。焦らずゆっくりとご指導して頂ければと思う。

○「相手に気持ちが伝わるあいさつをする」について、PTAの業務で地藏堂前信号で旗当番をした際、土の学年の子も大きな声で「おはようございます。」と挨拶をしてくれて驚いた。私からではなく生徒の方からだったので、とても嬉しい気分になった。このような意識づけを続けていただくと、保護者や地域の方とのつながりも自然と生まれていくような気がしている。

○挨拶については、マスク着用の習慣が長期間続いており、相手の表情が分かり難いので、地域の方々へ挨拶しにくい部分もある。学校内や挨拶運動で街頭に立っている時は、多くの子どもたちが挨拶をしてくれる。

▲朝の登校時の挨拶は、マスクしている事もあるが、数年前より気持ちの伝わる挨拶が少ないので、気になる。

▲挨拶について「おはようございます」に限らず、場面に応じて「ありがとう」「ごめんなさい」が言えているのでしょうか。自分の気持ちを友達に言うことができますか。困っている子を助けることができますか。遠からずつながっていくと思う。

☆「相手に気持ちの伝わるあいさつをする」は、他の項目に比して地域の方が受ける印象があまりにも低い。コロナ禍でマスク着用という面はあるものの、故意に挨拶をしない児童もあり、「挨拶の大切さ」を理解させるべき。声の大きさを問うべきではない。児童側は8割がしていると回答しているものの、地域との認識の格差が大きいのはなぜかを考えてほしい。

☆指標についてももう少しどのような活動をされたのかがわかるようにされた方が良いと思う。評価する側としても、何をどう評価してよいか迷うところだ。先生方の評価に報いるような評価をされたらいいかがか。

☆達成状況について保護者や地域が評価するのは難しいと思う。それを評価するだけの先生方の取組を作るのが難しいと思うので。また、達成のための数値目標をどこで評価するのかわかりにくい。

○子どもたちが安心して学ぶためには、落ち着いた学習環境が大切だと思う。先生方の努力には頭が下がる。今後も家庭との連携はもとより、一人で抱え込むのではなく、大変だとは思いますが全教職員で支え合って頑張ってもらいたい。協力できることがあれば、できる範囲でお手伝いさせていただきます。

○校区内は非常に交通量の多い地区です。ヘルメット、一旦停止等は、車に乗っている側からすると良くできていると思う。

▲昨年、踏切での危険行為の問題があった。大事故にならないよう注意が必要である。

▲良くない評価が多く、今後大きな問題にならないか気になる。アンケートの結果を踏まえ、改善できるところは直して頂きたい。

○自分の良い所の自己肯定感の低さは、自分の事をよく知らないと思っているからなのかも。周囲から見ても何か良い所があったら誉めてあげるとかすれば、自ずと肯定的に自分を見るようになると思う。

今後の改善点

- ・重点取組については、これまで通り継続していくことで、確かな定着を図る。
- ・自転車乗車時は、子どもだけでなく大人も必ずヘルメットをかぶるよう啓発する等、交通安全に対する高い意識づけを進めていく。
- ・人と人がつながる挨拶運動に児童が主体的に関われるようにし、児童会や各委員会などの取組を活性化したい。
- ・安全指導では、防犯・防災訓練の定期的実施を計画的に進めたい。
- ・児童が安全・安心に過ごせる環境整備を進めるとともに、安全に視点をのぞいた日常の生活改善に児童が主体的に関われるよう、児童会などが中心となって活動を進めたい。
- ・情報モラルの遵守やスクリーンタイム削減の促進など、親子読書や日常を振り返る学習などの手立てを考え、進めていきたい。
- ・ソーシャルスキルトレーニングや出会い学習など、児童の自己肯定感・自己有用感を高める取組を取り入れる。
- ・教材を使って「自分にいいところがたくさんある」ことに気づかせたり、「キラキラさん」を発表する取組など子ども同士で互いのいいところを伝え合ったりして、対話を通じた活動を継続していく。
- ・教師の叱ることが多くならないよう、児童を率先して褒め、児童の手本となる。
- ・児童自身が考えられる場面を増やす工夫に取り組む。
- ・欠席の多い児童について、児童の小さな変化にも教師がいち早く気づき、声をかけ、適切な支援を行う。
- ・児童の様子について保護者と連絡をとったり、必要に応じてスクールカウンセラーなど関係機関につないだりして、早期に対応する。

評価項目(3)家庭・地域との連携
本年度の活動(具体的な手立て)と指標

①地域とともにある開かれた学校づくり

- ・社会科・生活科・総合的な学習の時間等において、キャリア教育とも関連させ、地域の方など外部人材を活用した取組を実践する。→各学年で実施
- ・地域づくり協議会と連動した学校運営協議会の開催 →年6回
- ・「学校だより」の発行とHPの更新 →たより:年10回以上, HP:月1回以上
→保・地アンケート「学校は教育活動の公開や情報発信に努めている」
(「よくできた」と「だいたいできた」を合わせた達成度) 90%以上
- ・学校アンケートの実施と公表 →年1回
- ・地域づくり協議会との連携し、安全安心な地域づくりを進め、学校や地域の安全性を高める。
- ・地域の見守りのもとでの津波対応引き渡し避難訓練の実施 →今年度は1回
- ・学校支援ボランティア活動を充実・発展させ、地域の力を活用した教育活動や学校運営を推進する。

達成状況及び成果と課題 ※ ○→達成できている, ▲→達成できなかった・課題が残った

① 地域とともにある開かれた学校づくり

- ・社会科・生活科・総合的な学習の時間等において、キャリア教育とも関連させ、地域の方など外部人材を活用した取組を実践する。→各学年で実施
- 昨年度まではコロナ禍のために多くの取組を見送らざるを得なかったが、今年度は、徐々にではあるが、地域人材を活用した学習や学習支援ボランティアのサポートを活用することができた。定期的に来校している図書支援員やICT支援員の活用もより活性化されている。
- ・地域づくり協議会と連動した学校運営協議会の開催 →年6回
- 協議会では、学校生活や学校行事の運営や安全安心につながる支援体制、学校環境の整備、地域づくり協議会との連携について熟議し、様々な運営に役立てることができた。
- ・「学校だより」の発行とHPの更新 →たより:年10回以上, HP:月1回以上
→保・地アンケート「学校は教育活動の公開や情報発信に努めている」
(「よくできた」と「だいたいできた」を合わせた達成度)90%以上
- ▲保・地アンケート「学校は教育活動の公開や情報発信に努めている」保護者は93.1%と指標に届いたものの、地域は87.9%と指標にあと少し届かなかった。学校だよりは年間10回以上を達成する見込みで、HPの更新は毎月行うことができた。本来ならば、行事毎に情報発信することが理想ではあるが、業務の都合でタイムリーに発信することが難しい時も多い。多くの方にご理解いただいているが、これに甘えることなく、より分かりやすい情報発信と公開を進めていく。
- ・学校アンケート 年1回(指標値年1回)
- 2学期末に児童・保護者・地域のすべての方にオンラインで実施した。冬休み中に実施したこともあり、全ての方に回答をいただくことができなかった。来年度は、全ての方に回答していただけるよう、時期や方法等の改善を図る。
- ・引き渡し避難訓練 1回(指標値1回)
- ▲児童アンケート「自分を守る力はあるか」
教職員69.6% 地域81.2% 保護者 80.9% 低学年 74.2% 中高学年87.5%
- ▲平均すると約8割の子どもに意識がついてきていることになるが、決して高い値ではない。社会科や総合的な学習の時間において、3・4年生で防災についての取組を行ってきたことで、高学年において意識の高まりが見られたと考えられる。海岸沿いの地域であることも考慮し、今後も取組を進めていきたい。
- 地域づくり協議会様、江島六丁目・七丁目自治会長様、鈴鹿市教育支援課様のお力添えをいただき、地藏堂前の塩浜街道沿いにガードレールを設置し、安全な通学路に変更することができた。

学校関係者評価

- ・ いざという時に、命を守る行動を子どもたちがとれるように、津波避難訓練(江島総合スポーツ公園への避難)を今後も継続する必要がある。
- ・ 地域づくり協議会、自治会のお力添えにより、長年懸案となっていた地蔵堂交差点付近の通学路にガードレールを設置することができた。運動場からボール等が塩浜街道に出ていかないようフェンスを高くする要望も、地域の皆様と継続していきたい。
- ・ 不審者に対する子どもたちの対応訓練を継続し、地域と連携した取組に発展させていきたい。
- ・ 地域行事への児童の参加をさらに増やしたい。それにより、学校・家庭・地域の連携をさらに強めていきたい。
- ・ 子どもを健やかに育てていくために、学校・地域で保護者が親業を学ぶ場を保障していく必要がある。PTAにおいても、そのような活動を進めてほしい。

○たくさんの方々の協力を得られたのでよかった。

○地域づくり協議会に校長が常に参加いただき、学内の報告とともに地域活動に理解いただき、両者にとって連携ができています。そうしたことから協議会主催の活動・行事に児童が参加できています。

▲まちづくり協議会と連携を取り合い、地域とのつながりをもっと増やすべき。子どもたちをもっと地域行事に参加させることにより、地元の人とのつながりを増やしてもらいたい。

☆「避難訓練」では、地域づくり協議会と連携し、「とにかく武道館へ逃げる」といった繰り返しが、児童ばかりでなく、地域住民の安全性を高めていくことで重要な活動となっている。

○海岸清掃ボランティアでは、親子が一緒になって清掃活動中、子どもの質問に父親がゴミの分別の理由や清掃の大切さを教えていた。学校ではなく、家の中ではなく、海岸の砂の上を歩きながらの会話で、とてもいい機会となっている。ぜひ継続していきたい活動である。

○「学校だより」は、プリントされたものが校区内自治会の回覧として全住民に披歴され、住民と学校の大きな接点となっている。子どもや孫が小学校に行っていない住民にとっても、小学校への関心事であり理解を高める唯一の仕組みであり、継続して頂きたい。

○地域の方々には「学校だより」を回覧にて全戸に情報が伝わっている。これらの活動が学校への理解・協力に繋がっていく。目標達成には届かなくても、けっしてむだにはなっていないので、引き続き継続をお願いしたい。

○学校と地域の関係は良好である。特に学校だよりなどでもわかる。

○学校からの情報発信は、とてもよくされていると思う。最近では、学校への不審メール、大雪に伴う登下校時のお願いメール等、メールにての発信により、子どもたちを地域を含めて守るという意識や行動ができて良かったと思う。

○マチコミを利用してスピード感のある情報伝達がされていて安心である。

☆学校にHPがあることを保護者や地域の方は認識しているのか。学校の様子は「学校だより」で知ることが多い。ペーパーレス化も図れるため、HPをもっと活用されても良いと思う。

☆評価に関しては基準が高いのでは。物事は急がず焦らずじっくりと進めていくことも大切だと思う。

今後の改善点

・地域合同の津波避難訓練を定着させ、災害時に児童が確実に自分の命を守る行動ができるよう、日常から防災意識を高めていく。

・運動場の防球フェンス設置、地蔵堂交差点信号機のドライバーへの周知徹底の取組など、地域づくり協議会・自治会・地域住民・PTA・市と連携して、学校の安全な環境づくりに取り組む。

・避難訓練だけでなく、不審者対応訓練、交通安全教室など、地域と連携できることから図ってほしい。

・withコロナに社会生活が転換していく中で学校・家庭・地域が連携を深めるために、地域づくり協議会の行事等に積極的に参加し、人と人がつながる日常生活を創ってほしい。

・PTAの部会を中心とした保護者の子育てに関わる学びの場をつくってほしい。

評価項目(4) 学び、働きやすい環境

本年度の活動(具体的な手立て)と指標

① 教職員の資質向上 学び続ける教師集団をめざす

- ・教職員向けに教職員用PCの使用法の講習を実施 → 月1回以上
- ・校内研修の充実 → 外部講師の招聘等による主体的・対話的な学び方を育成する研修会の開催年3回以上
- ・全教員が授業を自主公開し、職員同士で授業づくりを学び合う機会を保障 → 学期1回
- ・「経験5年以下教員研修」へ全教員が参画し、若手教員の育成を図る。
- ・ライフステージに応じた研修講座等への積極的な参加 → 一人2講座以上受講
- ・危機管理マニュアルの不断の見直しを図る。

② 働き方改革の推進 総勤務時間の縮減に向けて

- ・行事や会議の精選と会議の進め方の工夫 → クロムブックを活用したペーパーレス化
- ・定時退校日の設定 → 引き続き、月2回設定 退校職員90%
- ・放課後開催の会議を60分以内に終了 → 職員会議・校内研修会以外の会議の80%
- ・留守番電話対応の継続。会議時間を留守番電話対応に加える。
- ・朝の欠席連絡をマチコミ(メール連絡システム)に変更。
- ・月80時間を越える時間外労働者の年間延べ人数 0人(昨年度同様)
- ・月45時間を越える時間外労働者の年間延べ人数 0人(昨年度7人)
- ・時間外労働 → 昨年度比で、一人月当たり1時間削減(昨年度23h/人・月)
- ・年休取得 → 昨年度比で、一人年間1日増加(昨年度13.6日/人・年)

達成状況及び成果と課題 ※ ○→達成できている、▲→達成できなかった・課題が残った

① 教職員の資質向上 学び続ける教師集団をめざす

- ・教職員向けに教職員用PCの使用法の講習を実施 → 月1回以上
- ICT支援員によるICTミニ研修を月1回以上行ったり、自主的に市や県のICT研修に参加したりできた。授業や児童の学習、校務へのICT活用度が高まった。
- ・校内研修の充実 → 外部講師の招聘等による主体的・対話的な学び方を育成する研修会の開催年3回以上
- 校内研究授業を年3回、外部講師による示範授業を年5回行うことができた。本校の授業改善のモデルのきっかけとなっている。また、校区や市内、県内の研究会への参加等、積極的に研修を行うことができた。
- ・全教員が授業を自主公開し、職員同士で授業づくりを学び合う機会を保障 → 学期1回
- ・「経験5年以下教員研修」へ全教員が参画し、若手教員の育成を図る。
- ▲全教員が学期1回授業の自主公開を行うことができたが、授業を参観する教員がやや少なかった。これは、「経験5年以下教員研修」へ全教員が参画することについても、同様な状況であったと言える。若手教員の育成をはじめ、教員の授業力を向上させるために、全教員がもっと授業を見合うおうとする意識を高めさ
- ・ライフステージに応じた研修講座等への積極的な参加 → 一人2講座以上受講
- ▲ライフステージに応じた研修講座に2講座以上参加することができなかった教員もいた。長期休業等を利用する等、積極的な活用が図れるような学校運営を行ったうえで、周知徹底を図りたい。
- ・危機管理マニュアルの不断の見直しを図る。
- 児童の安全を第一に考え、職員の共有とマニュアルの見直しを行ってきた。また、職員研修・訓練を通じて、分かったことや改善点は、その都度、マニュアルに反映させてきた。教職員のコンプライアンス意識向上の一助となった。

② 働き方改革の推進 総勤務時間の縮減に向けて

- ・行事や会議の精選と会議の進め方の工夫 → クロムブックを活用したペーパーレス化
- コロナ禍のため、中止を余儀なくされた行事もあったが、行事の精選や企画の見直しにつなげることができた。
- 昨年度に続き、職員会議をペーパーレスで実施した。データを共有化していくことで、よりスムーズにできるようになっている。
- ▲打合せについては口頭による提案が多いため、時間がかかっている。ホワイトボードやデータにある提案内容を各自で読むことで口頭提案に代えるなどして時間短縮を図っていききたい。
- ・定時退校日の設定 → 引き続き、月2回設定 退校職員90%
- ▲月2回の設定はできたが、定時退校率は70.8%(指標値90%)と到達できなかった。コロナ対応と再開された行事等、一時的に仕事が増えたことも一因と考える。設定日に限らず定時に退校できるよう、業務の効率化ができる場所が残っていないか、更に考えていききたい。
- ・放課後開催の会議を60分以内に終了 → 職員会議・校内研修会以外の会議の80%
- ・留守番電話対応の継続。職員会議時間を留守番電話対応に加える。
- 職員会議・校内研修会以外の会議を60分以内に終了する達成率は、81.1%となり達成することができた。今後もICTを活用するなど、会議の効率化による時間短縮を図りたい。
- ・朝の欠席連絡をマチコミ(メール連絡システム)に変更。

○コロナ禍以降、連絡帳による欠席連絡を原則中止とし、電話による連絡を受けてきたが、朝はその対応に掛かり切りとなり、多忙を極めていた。2学期よりマチコミによる欠席連絡システムを導入することで、その対応が激減した。

- ・月80時間を越える時間外労働者の年間延べ人数 0人(昨年度同様)→今年度は0人
- ・月45時間を越える時間外労働者の年間延べ人数 0人(昨年度7人)→今年度は2人
- ・時間外労働→昨年度比で、一人月当たり1時間削減(昨年度23h/人・月)→今年度は20.9h
- ・年休取得→昨年度比で、一人年間1日増加(昨年度13.6日/人・年)→今年度は10.6日

▲決して年休が取りにくい雰囲気ではないが、昨年度より年休取得率が減少したのは、行事の再開等に伴う業務量の多さにある。今後、私たち教職員が、何を「子どものため」すべきなのか熟考し、「今までやってきたから」ととられることなく、意識改革や業務の改善を図っていく。合わせて、勤務時間と在校時間の違いについても、職員全員で共通理解していきたい。

学校関係者評価

- ・他の教員の授業を参観する教員が少ないのは、残念である。授業の職人として主体的に学ぶ姿勢を高めてほしい。教員の経験年数に応じたスキルアップができる研修も必要だ。
- ・今年の教員の有給休暇取得率は、一定の評価をしてもよいのではないかな。

○自主公開について達成できたとしたほうがよい。その上で課題を述べる方がよいのでは。

☆「自主公開時、授業を参観する教員が少なかった」件だが、児童たちに主体的自習の時間を持ってもらえないか。学級委員や日直が中心となり、テーマを出し合って全員で話し合い、先生が戻ってから深堀する。そんなことは行われていると思うが。

○教師の皆様は、大変お忙しいのにいろいろと努力されていると思う。高く評価されて当然だ。

○どの先生も頑張っている様子を拝見している。

☆本来の業務以外にも、コロナ対応をはじめ色々なことがあり心身ともに大変だったと思う。個人や学校だけでなく、解決できない部分もたくさんあり難しいが、少しずつでも改善できるところは今後も取り組んでいく必要がある。

▲chromebookを活用したペーパーレス化という点は、教職員の方自身のchromebookの使用法の勉強にもなり良かったと思う。ただ、chromebookを開くと時間がすぐ経ってしまうことはなかったか。導入されてから日も経ち、慣れてきているので、教職員の方は、今はそうでもないかもしれないが、時間外労働の一つになっていないと良いが。

▲「月80時間を超える…」ですが、そもそもこの項目を入れること自体が問題。80時間越えは問題外である。

▲定時退校率が低すぎる。もっと上げてほしい。各先生の業務量が多くないのか。各先生のスキルレベルが違うと思うので、改善が必要。新任や転入してきた先生には、昨年もいた先生がもっとフォローすべきではないか。

▲年休取得は民間企業と比べると少ない日数である。効率の良い業務を実現してリフレッシュできる時間が増えることを期待したい。

☆企業でも働き方改革が進められ、年休を取得する、家庭や健康を優先する等盛んに言われている。3年間のコロナ禍でそれまでは当然のように行われていた行事なども再開されるようになったが、本当に必要かを考え、準備などに費やす時間などの負担と効果を軸に思い切った判断をしても良いと思う。

☆年休取得日数が下がったが、新型コロナによる休暇が影響していないか。もっと客観的な数字として出せるのではないかな。

今後の改善点

・校内の様々な授業研修に積極的に参加し、意見交流を行うことで、自らの職人としての授業力を向上させる。

・校外の研修講座や他校の研究会、オンライン研修など、自己研鑽のための学びの場に積極的に参加し、学びを学校に還元し、教職員集団で主体的なよりよい学校教育の構築へ進めていく。

・自らの業務の改善を図りつつ、教職員がオンとオフの切り替えを意識し、ワークライフバランスを整え、公私ともに充実した生活を送れるよう進めていく。